

宗教雑感

私はミッションスクールに通っていた中学生の時にカトリックの洗礼を受けました。その後、教義と現代科学との相反や中世キリスト教思想の残虐性などについて考え続けた結果、大学生の頃には宗教とは距離を置くようになりました。そして、大学院博士課程に在席していたときにカトリックから離れることをノートに綴って決意表明としました。

以来、宗教について議論する場をもたなかったので、宗教を論じる機会はないものと思っていたのですが、定年後に再会した高校の同期生から「神について語ろう」と再三迫られて、数回のメールのやり取りをしました。この往復書簡で、思いもかけずに、私のカトリック並びに宗教に対する思いが包括的に展開できたので、残しておきたいと思うようになりました。

友人のメールを公開することは控えるべきことと思うのでどのように発表しようかと考えたところ、私のメールだけでも十分に議論の経過を追ってもらえることと考えるに至りました。多少論点の把握がしにくい箇所があらうかと思いますが、ご寛容ください。なお、友人との往復書簡は、結局議論が噛み合わぬまま物別れとなりました。

この議論は、友人から「カトリック・あい」というサイトの記事を読むことを勧められたことがきっかけとなりました。

2021/2/1

返信が遅くなって失礼しました。「カトリック・あい」のいくつかの記事を、ある思いを検証しながら読んでいました。まだ全容を把握したというわけではないのですが、いくつかの記事に興味深く読ませてもらいました。

先ず、トップページの主旨ですが、「カトリックの今」に関心のある人々を対象としていることは良いことだと思います。私などは「カトリックの昔」が受け入れられなかったことがカトリックを離れた一因でもあるからです。

歴史の教科書に出てくる贖宥状や十字軍や異端裁判はカトリックの eye からは正義だったかもしれませんが、カトリックの愛やキリストの愛とは相容れないように思います。私はこの頃のカトリックを「キリスト教が不良少年であった頃」と呼んでいます。公会議で形而上学的な論理展開をして異端を排除してきた歴史は、実証主義的科学を至上とする者にとって受け入れがたく思いました。

しかし、現世を生きる指針としてキリストの愛を抱き、自分の行為を良心に照らして検証することはとても良い生き方だと思います。そのように生きれば、天国がなくても、復活がなくても、恐れることはないでしょう。

盗むなかれ、殺すなかれ、姦淫するなかれ、も絶対的な倫理基準にはならず、愛するゆえの結果ということも多々あるでしょう。愛に基づかないそれらの行為が一度の告解で許されるなどと言うのはどんな良心からの結論でしょうか。

キリストを信じる者が、カトリックを標榜しようがプロテスタントと主張しようが、大した問題ではなく、信念を通せばいいことだと思います。教皇の不可謬性を捨てれば、教義などは大した問題ではない、というのが今の私の考えです。

私は最初に、不良少年だったカトリックと出会ったために、別れることになりました。人間の理性と感性を大切にするルネッサンス後のカトリックが、さらにヨハネ・パウロ二世のバチカン公会議を経てたどり着いたカトリックになってから出会えたら、別の関係になっていたかもしれません。

カトリック・あいの記事の中にも、如何にも人間的な組織運営の未熟さを読むことができました。観念的な愛は指導原理にならないことが示されているように思います。

心に残る詩があります。「神のごとくゆるしたい 人が投ぐるにくしみをむねにあたため 花のように になったら神のまえにささげたい」八木重吉

これを少し変えて、「キリストのごとく愛したい」という詩を作ることができそうです。さあ、どう続けますか？

ただし、こんな生き方をしていたら、周囲からは無害な人間として軽んじられることは必定です。愛することは難しいと思います。

勝手なことを連ねました。ご容赦ください。またいつか、こんな題材でお話することがあるでしょう。楽しみにしています。

岸 邦和

2021/2/2/20:11

お酒、喜んでもらえてうれしいです。イワシとシャブリの相性は？と考えて、めざしではシャブリが負ける、マリネだったらいいかな、と勝手な想像。浦霞のツマミは何ですか？

ところで。私が論ずるカトリック論あるいは宗教論は、私小説のようなもので、学術的な裏付けが弱いところが多々あります。それにもかかわらずなぜ主張できるかという、世の哲学や宗教論が客観的な証拠と論理に依らずに、提唱する人の考えを論理的に記述しているだけだと思い至ったからです。

なので、議論をして正邪を決するとか、優劣を競う気は全くありません。知的な興味を探究するためには広く議論して多くの考え方に接することが大切であるとの考えです。

第二バチカン公会議がエキュメニズムという宗教の融和を提唱したことは、不良少年だったカトリックしか知らなかった私には、「良く悔い改めた」との思いがあります。愛や正義を説く宗教が原因で処刑したり戦争をした例は枚挙にいとまがありません。

キリスト教の神が遍在することを別の言葉で表現すると、宇宙全体に物理法則が成り立つことから、自然法則と考えることができます(私小説的ですね)。我々が接する自然法則には、星の運行や天候などの物理法則や、植物の生育や遺伝等の生物法則、物の変化に関する化学法則などがあります。これらすべてを包括して一つの自然法則と考えることができるし、天候の法則、森の法則、竈の法則と個別に表現することもできます。私は、一神教は前者、多神教は後者と類型化しているので、両者の違いはありません。

ここで、自然法則は人格をもたないので人格神にはなりません。カトリックの教義との違いがここにあります。キリスト教による一神教の正当性は、列王記Ⅰの18章、バアルの預言者との雨を巡る戦い程度の論拠なので、信じるためには理性を抑制しなければなりません。

もう一つ、旧約聖書を読むと中近東の諸国の争いの歴史に辟易します。戦争によって国境が変わるのは歴史の必然です。しかし、ある民族の繁栄した時期を基に、それまでの苦難の歴史やそれ以降の復興の努力を神との約束と考えることは、無関係な私にとっては苦痛ですし、正義とは考えられません(これも私小説的ですね)。

またまた長くなりました。とりあえず、一神教と多神教についての私見として。

追記:カトリック教徒としてもがいていた頃に宗教のあるべき姿として考えたことが、バチカン公会議に表明されていたという意味で、自分は革新的であったと思いました。また、理性は感性に打ち勝つべきであるとか、聖書の正義が人間の理性や感性に優先するという教えも、人間を幸福に導かないと思いました。私のこのような考え方はルネッサンスを通して西欧文化の基礎となっており、カトリック教徒の私としては革新的だったと思います。これらの点では貴君と近い考え方だと思いますが、いかがでしょうか。こちらの話の方が私の好みに合っています。

私の立場を表現するなら、信念の不可知論者 agnostics です。多くの日本人も感覚的多神教あるいは生活習慣的多宗教者だと思います。おそらく、日本では神を定義することが少ないので、無神論者は少ないものと思います。この題材についてはまた別の機会に。

岸 邦和

2021/2/2/20:11

第二バチカン公会議とヨハネ・パウロ二世の関係は私の記憶違いのようです。

私は革新的な立場から、第二バチカン公会議の意義を評価しています。ヨハネ・パウロ一世と二世については記憶があいまいで、整理が必要であることを自覚しました。

前のメールの他の箇所については変更はありません。失礼しました。

岸 邦和

2021/2/4/22:33

ご友人は貴君の説明に納得されましたか？ 納得されたらそれでいいと思います。こういった哲学的な議論の場合、同じ言葉でも人によって意味するところが微妙に違うので、先ずは概念規定が必要となります。概念規定をしても未だすれ違うことがあります。

ご友人が納得されれば、まさに琴線に触れる助言だったということでしょう。

人間の精神活動を論じる場合、理性や良心や自由意志といった精神活動の源泉を論じておくことが大切だと思います。高校生物でも脳の活動は電気刺激と神経伝達物質の作用であると教わります。これらの機械論的説明に対して、魂とか理性などがどのように働くかはおそらく公教要理では説明していないと思います。

17世紀前半にデカルトは、人間は理性があるので動物とは違うと言いました。それからほぼ100年経って、ヒュームは理性は情念の奴隷であるといい、ラ・メトリは人間も動物と同じように機械であると言いました。

人間は機械なのか、それとも機械になにかが加わっているのかという疑問はその頃からの大問題なので、不思議と考えるか、自然と考えるかは聞き手の状態によるとと思います。

不確定性原理や放射線元素の崩壊のような確率的現象は、量子の性質と考える人もいれば、アインシュタインのように、神はサイコロを振らないと考える人もいます。実際のところはまだまだ分からないので、どちらの立場も信仰に近いものだと思います。

宗教と科学に真面目に向き合う人でも正反対の結論になります。私はどちらも正しいかあるいは間違っていないと思っています。今、結論が出せるほど人間の知識は十分ではありません。

キリスト教が日本に定着するための条件を考えてみました。創世記の、世界を作る順序が違う2つの記述、世界ができてからの時間、生命の進化、など旧約聖書を信じるには克服しなければならないことがいくつも出てきます。加えて論敵を殺すという残虐性は現代人は容認できないでしょう。すると、聖書を古事記と同じような文学と位置付けることが第一条件になるのだと思います。

また、キリスト教が多神教を否定しながら、ギリシャ神話を教養としていることにも留意したいと思います。カラバッチョもルーベンスもギリシャの神々を描いています。この精神性のゆるさも日本に適用することが必要でしょう。

アレキサンダー大王は征服した国々の文化を守ったと言います。文化は精神性を背景に持つので、否定しないことが大切だと思います。一神教も多神教も対立しない解釈ができると思います。本来のキリスト教は寛大なので、カトリックもこのように変わって行けばいいのにと私は思います。エキュメニズムの精神を拡大するだけでいいんです。

岸 邦和

2021/2/5/20/29

いったいカトリックとは何なのか。幼児洗礼を受けたカトリック教徒、自分の意志で洗礼を受けたカトリック教徒、カトリック以外の宗教を知らない例えばフランスのカトリック教徒、エキュメニズム以後に洗礼を受けたカトリック教徒、それぞれの信心の形態が違います。

カトリックの名のもとに破門したり破門を解いたり、異端審問して火刑に処した後に列聖したり、不良少年時代のキリスト教は神の名をかたった手のつけられない暴れ者でした。しかし、今のカトリックはとても穏やかな性格です。

カトリックは変わります。今教会がどんなに非科学的な見解をもっていたとしても、どんなに不道德であったとしても、一般信者としては、「自分がされたいように相手に接しなさい」という最高の道徳心に従うことがカトリックの道を歩むことになるのだと考えるなら、教会の教義は無視して、自分がカトリックの正統なんだとの信念でカトリックで居つづけることができると思います。そしてカトリックが社会に認められる方向に変わるまで待つでしょう。一方で、これらの不合理や教皇の不可謬性や聖書の絶対性を強制的に受け入れなければならないと感じたら、カトリックを去ることになるでしょう。

自分は日本人だけど政府の方針は認められない、とか、親父の考え方とは正反対だけど僕は岸家の人間だとかといった、組織と個人の関係の類型で信者となるかどうかを決めていいものと思います。カトリックとは、真面目な求道者に対しても道を拓いているはずです。

あまり教会にもゆかず、告解もせずに聖体を拝領し、宗教をあまり考えない西欧の生活習慣的カトリック教徒が、真剣に洗礼を考え、信仰とは何かを考えて迷い続ける日本人よりも優先的に、天国の切符を手に入れられることは、腑に落ちません。

私がハチャメチャな理屈を引っ提げても、自分はカトリックだと言えばカトリックだという考えはどうですか？ 不良少年とのお付き合いの中から考え出した一つの結論です。

岸 邦和

2021/2/8/18:35

またまた理屈っぽい議論にお付き合いをお願いします。

多神教の国や仏教国に生まれた人々が、伝統的な生活習慣としての宗教を信じることは、素朴で自然なことだと思います。それこそが宗教であると私も思います。そのような宿命が神の恩寵だとしたら、彼らにキリスト教への改宗を求めることは必要なのでしょうか。布教することはキリスト者としての自然な行為としても。改宗までも？

キリスト教による先住民族支配の形態は様々で、先住民の生活に溶け込んで緩やかな忍耐強い布教をした人々から、改宗しなければ殺害するという暴力的な人々までいたと、歴史の教科書にあります。1500年代のスペインによるマヤ文明やインカ帝国への侵略は、キリスト教の布教と植民地化と金銀の収奪がセットになっていたそうです。十字軍や贖宥状などと併せて不良少年の悪行です。

生活習慣的キリスト教徒が、生活習慣的原始宗教をもつ先住民を略奪し虐殺し改宗をせまることを正当化できるのでしょうか。それとも先住民にヨブになることを求めるのでしょうか。

イスラエルの民の苦難の歴史が聖なるものならば、16世紀のマヤやインカの苦難の出来事は何故聖なるものにならないのでしょうか。神の恩寵はイスラエルの民だけに注がれるのでしょうか。

私が未だにカトリックとの縁が切れない理由の一つは、カトリックがこのような闇の歴史をもつからです。愛を解きながら理不尽な非行を繰り返した歴史は、人間の弱さとして私の記憶に刻まれており、もうそんな過ちは犯さないとの決意を確認できるからです。プロテスタントは歴史がないだけに独善が過ぎるので反省がありません。

そうです。私が見ているのは過去と現在のカトリックです。貴君は現在のカトリックの立場からのご意見と拝見しています。

現在のカトリックを論じる場合の大きな問題は精神活動に関することだと思います。

1200年代から1500年代頃に解剖学が成立し、1600年代に血液循環が確認されました。1800年代中葉に顕微鏡の発達によって、細胞学や細菌学が体系づけられ、1900年代になって遺伝学や発生学、大脳生理学が確立したと認識しています。まだ科学的な知識のなかった時代に、理性や良心や自由意志としか名付けようがなかった精神活動を、現代の言葉で表現することは、生命科学の一端を担う知識人にとって義務と考えます。

いつまでもスコラ哲学の言葉に頼るのではなく、例えば教会が認めないとしても、科学者の言葉で表現しようとするのが、これからの時代にキリスト教を布教するために必要なことだと思います。そうすることによって、様々な現象の概念規定を明確にすることができ、入信を迷っている知識人との議論を深めることができると思います。

ちなみに私の洗礼名は、トマス・アクイナスです。

岸 邦和

2021/2/8/21:27

精神活動について

私が自ら考えて行動した場合、これを私の自由意志と考える根拠を私はもちません。

私が考えることが、これまでに形成した神経回路と考えることによって起こった電気刺激と神経伝達物質の相互作用から必然的に導き出せることであって、ちっとも私の自由な意志ではないかもしれないことを否定できません。

質量 m の物体に、ある方向に F という大きさの力を加えた時に、 $F = m\alpha$ で表される加速度 α で運動を始め、他の力が働かなければそのまま運動を続けるというニュートンの法則は、世界の決定論として一世を風靡したようです。運動する物質が2つ、3つと増え、無限に近くなっても、それぞれの物質の運動は運動方程式によってきっちりと予測できます。神が最初に力を加えたとおりに世界が動くという運命論もしくは決定論です。

同じ事が脳の働きについても言えるとなると、私が自由意志で決めたことも、実は必然的な帰結ということになります。別の言葉でいうと、私が「転んだ」といくら主張しても、神の側からは予定されていたことであるということ。この解釈は、人間は自由意志を与えられていないということを意味します。

私に自由意志があると強く主張する自信もないし、はたまた、私の考えは電子の動きと化学物質の働きであって私の自由意志などないと主張する根拠もありません。

だから私は不可知論者なのです。

人間は自由意志を与えられたという主張と、人間の決断は神のわざの中にある主張は、矛盾するように思います。うまい説明を考えてください。

岸 邦和

2021/2/10/7:12

昔のカトリックからは異端として責められるだろう言説を辛抱強く聞いていただいたことに感謝します。おそらく、貴君の考え方とは大きく異なっていると思います。

不可知論者は本当に不可知であるのかどうかを問い続ける運命を背負っています。信仰をもつ者が神の沈黙のまえに問い続けるように。だから、提起された問題にそれぞれの立場から答えを探ることが大切なのではないかと思います。カトリックが世界に浸透してゆくためには、古い教義と昔の行為を見直し続けることが不可欠だと思います。

新旧約の聖書の記述の中で大切な箇所とそうでない箇所の選別、神の名のもとに行われた理不尽な行為の反省、科学による物質的な生命理解を基にした教義の再構築、などを行うと、一神教以外の社会にも受け入れやすくなると思います。周囲の社会を変えるよりカトリック自身が変わらなければいけない課題だと思います。エキュメニズムの精神を完遂するためにも。

自由意志と神の予定(お釈迦様の掌でもいいんですが)の関係について私なりに説明しようと試みると、この議論の前提としたニュートン力学による予定説を取り払って、神がサイコロを振ると考えれば、自由意志の入り込む余地が出てきます。勝手な解釈ですが、不可知論者は課題を放棄せずに、このように考え続けることが誠意だと思っています。

それではいろいろな民族に共通する宗教性についてはどう考えればいいか。私は宗教の源泉は人知や人力の及ばない力に対する恐れと敬意、将来や死後の世界に対する不安だと思います。これらはどの民族にも共通することなので、どの民族にも宗教があって不思議ではありません。エジプトの死者の書や宇治平等院の極楽浄土への旅やシスティナ礼拝堂の天国と地獄など、死後の世界を予測しようとする思いは多くの民族、多くの宗教で共通するように思います。

そして宗教の効用は、天国に行くためには現世での善行を求めるところです。本来、キリストの隣人愛のように現世での善行の結果として死後の安心が約束されるのに、宗教が天国のために善行を勧めるということになると、独善を許すことになります。その意味では、イエスチャンはキリスト教信仰と同等の道德性をもつものと思います。イエスの神性と復活を信じるけれど献金だけして善行をしないキリスト教徒よりも。個人的な信仰ならばどんな形をとってもいいんだけど、布教を考えるならただ「信じなさい、信じる者は救われる」では限界があるでしょう。

愛憎と恩讐の中の元カトリック教徒より

岸 邦和

2021/2/10/21:50

あはは。おっしゃる通り、転ぶ前も転んだ後も真摯な求道者です。不思議なことに転んだあとに滝のごとく恩寵が降り注いで、宗教や人間がはっきりと見えるようになりました。昔、難解で5ページも読めなかった哲学書を、一通り読み通せるようにもなりました。悪魔の恩寵か自然の恩寵かわかりませんが。

お話したような話題は一般の人とは話す機会もなく、静かに心に醸成してきました。話せるとしたら、カトリックであって機械論的生命論を勉強していて、理屈っぽい話を好み、異なる意見に対しても寛大な人と、なんとなく思っていました、そんな機会が来るとは予想しませんでした。ところが、そんな人が現れて、神について話そうなどと何回も言われて、ついに堰を切ったようにお話ししてしまいました。

勝手な理屈にお付き合いいただいて感謝します。

ただ、先のメールの、

>元気すぎますので、ほんとのことを語るには不十分かもしれません
の意味が分かりません。

まさかと思うけれど、死に直面したら来世の平安を求めるという意味ですか？ もしそうなら、それは宗教者が常用した脅しですよ。新興宗教や昔のカトリックはそう言って金銀財産を収奪したけれど、今のカトリックはそんなことは言わないと確信しています。それに宗教は衰えた老人や病人のためのものでもありません。

誤解ですか？ 真意は奈辺に？

創世記の「神にかたどって人間を作った」という言葉を、人間の理性が神のかたとどりと解釈してあれほど大切にしていたのに、時代を経てその地位は低下してきました。哲学者からは理性は情念の奴隷とされ、現代生命科学からは生物が生き延びるためには食欲が必須であり、繁殖するためには性欲が必須であることが明らかにされました。

人間が理性や良心を過大評価しすぎた結果、残酷な魔女裁判が起きました。人間のちっぽけな理性や論理性は言葉の遊びとして楽しむにとどめたいものです。

これまでの議論は私小説的に私見を述べたものであって、貴君の信仰を否定したことは一度もありません。信仰や信念は個人的なものであるから、議論の結果として転向することはあっても、転向させることを目的として議論することのないよう、細心の注意を払って議論に臨んでいます。カトリック

への批判はカトリックがより広く世界に受け入れられるための条件として述べたもので、貴君の信仰への批判でないことはご理解いただいていると思います。

投げかけたいいくつかの問題について、将来お答えをいただけると嬉しく思います。遠い将来のカトリックの発展を期して。

岸 邦和

2021/2/11/10:30

> 誤解ですか？ 真意は奈辺に？

だめですよ、そんな物言いは。誤解ではなかったと理解しました。私が私小説的と最初に申し上げたのは、知りもしない他人の人生に勝手なレッテルを貼って、自分だけの論理を他人に押し付けて、あたかもその論理に他人が気づいていないかのように上から断定する、そんな失礼のないように、お互いの考え方の基本を開帳する、という意味でした。

カトリックが発展するための基本的な条件をいくつか提案してきました。それらの課題については一向にお答えをいただけていないことは不本意です。「信仰」のひとつで解決する問題だったら、自分を変える必要はなく相手が変わるべきだという独善であり、エキュメニズムの精神とは相容れません。

一方で、貴君は私がカトリックの領域にいることをしきりに説いています。本人の意図を無視して。貴君にとってカトリックとは何ですか？ 洗礼の時に、「あなたはキリストを神としますか」「復活を信じますか」「永遠の命を信じますか」などと問われたことを思い出します。

日本国憲法はじめ多くのキリスト教国で保障されている信教の自由はたいせつです。この信教の自由が教会の共同体からは齟齬があるとの意見は、カトリックの方針とは考えられません。宗教と教育の分離の問題はフランスの教育史を紐解くとよく理解できます。現代的な意味での教会共同体は温厚ですが、聖職者なら教師となる資格をもつとしたことの弊害が大きく、フランスの教育界の大問題になりました。教会共同体の負の側面です。貴君には過去のカトリックの弊害についてもしっかりと論評してほしいと思います。

知りもしない他人の人生を「困っていない」、「苦勞が足りない」人間とレッテルを貼ることはとても失礼なことです。私は、一連のメールで「~と思います」という言葉を多用しました。貴君は「~なのです」という言葉を多用しています。まるで神が愚かな人間に諭すような物言い。根拠のない断定は議論を崩壊させます。歯科医師の貴君とカトリック教徒の貴君が今回のメールで完全に解離しました。

昔から外国人と宗教の話をするとうづが壊れるから避けなさいと言われたのを思い出します。貴君は外国人ではないけれど、やはり宗教の話はしない方が良かったと後悔しています。

貴君が、カトリックが変わり、聖書を古事記と同等の文学にするという提案には到底賛成できないことは十分に予知していました。私が転んだと自覚したのはカトリックを離れてから10年以上たってからでした。時間がかかります。しかし、カトリックを日本に定着させたいとの思ひを受けて、相手の変化を期待するよりも、相手を見下す方法ではなく、調和を求める方法で、なぜ受け入れられないかを考えることを真剣に提案しました。本当にカトリックを日本に定着させたいのなら、是非ともご検討ください。

岸 邦和